



1984年(昭和59年)
3月号(No.465)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- ヒマラヤの気象予報……………(1)
ラダック報告……………(3)
海外の山……………(3)
国際未確認動物学会発足……………(4)
高所肺水腫・高所脳浮腫の
既往者の追跡調査……………(5)
遠征・登攀ノートへ寄稿の
お願い……………(5)
山の本……………(6)
アムネマチン初登頂
よみがえる白瀬中尉
会務報告……………(7)

ヒマラヤの気象予報(要旨)

—高層天気図の見方と
ハング飛行へのアドバイス—

宮内駿一

ヒマラヤ登山での気象予報について、はっきりした結論を出したのは、一九八二年十二月十三日にダウラギリの冬季登頂に成功した北大隊である。この隊の名越隊員は、ニューデリーおよびタシケントからファクシミリにより受信した高層天気図で、気象の解析を試み、気圧の谷の通過直前が風が弱まることから、十二月十三日の登頂日を予報し、見事に成功している。この気象予報こそ、これからのヒマラヤの気象予報のセオリーを確立した最初であるといつて過言ではない。

ヒマラヤの気象予報の上で、高層天気図が必要であることは、北

大隊の例からもわかると思うが、一般には高層天気図には慣れていないため、とりつき難い人が多いのではないかとと思う。慣れれば、むしろ地上天気図よりも簡単でありながら、高層気象についての解説書が、気象の専門家向けのものしかないため、取りつき難くなっているのだと思われる。そこで今日は、高層気象に近づくための基本的なことをまずお話しすることにした。

◇高層気象入門
高層天気図には八五〇MB、七〇〇MB、五〇〇MB、三〇〇MBの四種類があって、通常は五〇〇MBのものが、大気全層の平均であるという理由から最も普及している。

地上天気図で、例えば冬のシベリア高気圧が一〇五〇MB、一〇六〇MBになっている時でも、上層の天気図で見ると消えてしまっていることがあるなど、高層天気図では全く地上天気図とは違ってしまっている場合も多い。これは空気は暖めると膨張し、冷やすと縮むことに原因しており、例えば一五〇〇mの高さの空気の一方の柱を冷やし、他の一方の柱を暖めたとき、冷やした方は、hMBに相当するだけ縮み、暖めた方は、逆にhMBに相当するだけ膨張している。これが五五〇〇mの高さになると、一五〇〇mの約四倍に相当するので、計算式の上では、

(500+4h) - (500-4h) = 8MB
となり、さらに上層に行つて九〇〇mに達すると、一二MBになる。このように上層に行くと、地上の高気圧や低気圧という気圧配置は破綻になってしまい、別の気圧場ができていくわけで、地上と上層では、気圧配置はかなり変ってくる。

◇偏西風は何故吹くのか
上層の気圧を北半球天気図で眺めてみると、北極は下層が冷たく、赤道は暖かいので、北極が低圧となり、赤道方面が高圧となっていることがわかる。

即ち上層では、赤道方面から北極へ向つて南風が吹くはずになるのであるが、地球自転の影響で、除々に右へ右へとずれて、西風になってくる。このように偏西風が吹く原因は、下層の寒気と暖気の温度差でできるわけである。

冬の間は、この偏西風は、この温度差が顕著に表われるため強いが、夏の間は、北極も暖かくなり温度差が小さくなるので、風が弱まってくる。

なお地球の軸が軌道面から二三・五度傾いていることや、山があったり、海があったりする関係で、最も気温が低い部分は北極ではなく、北極の周囲に三・四ヶ所に分かれて、低気圧として存在し、その間に気圧の峰と谷が形成され、等高度線にそつて偏西風が吹いている。しかもその風向も風力も時々刻々変化している。

この峰と谷の関係をよく理解して天候を予測することが、これらのヒマラヤ登山では肝要である。

◇ヒマラヤの天候と日本の山の天候との違い——起風力の説明
昔の飛行機は、地上の測候所からの予報を頼りに飛んでいたが、今は地上での天候は離陸と着陸だけが問題、離陸してしまえば、雲の上の成層圏を飛行するわけで、風力、風向だけが問題となる。これと同じでヒマラヤの場合も、あの高度になると水蒸気も少なくなるので、風が最も問題になってくる。何のことはない、そうなる飛行機と全く同じことになるわけで、風が問題になるといふことは、言葉をかえていえば、起風力が問題になるのである。

地上や日本付近では、強い風という台風や春先の低気圧、冬の西高東低の大陸高気圧などが原因としてあげられるが、高度が高くなるとこの他に、北極が低気圧、赤道方面が高気圧という温度差に起因する風が考えられる。これを整理してみると、上層の風は温度差に起因する風であり、下層の風は台風発生時にみられるように、水蒸気による上昇気流が風の起風力と考えられる。しかしこの水蒸気による風は一〇〇〇m〜一五〇〇mの高度が一番強く、水蒸気量は気温が10℃下ると半減してくるので、七〇〇MB、三〇〇〇m位

までが限界で、それ以上になると水蒸気が減ってくるから、低気圧に吹き込む風としては、むしろ弱くなり、五〇〇MBの高層天気図では、台風が消えてしまうこともありうるようになる。夏のように日本の上空の上層の風が弱いときは、台風も日本付近ではおとろえるが、春の低気圧や秋の台風の場合、日本付近で上層の風と合流するので勢力が大きくなる場合が多い。

なお七〇〇MB位までが、地上の低気圧に起因する渦巻きによる風の限界で、それから上部は偏西風による風が支配することになり、七〇〇MB位を境にして、風の性格が変わっていることに注意する必要がある。このような訳で、七〇〇MB、三〇〇〇m付近は、上の風と下の風の境目で乱気流も生じ易く、そのために丁度三〇〇〇mにある日本の山の気象も風が問題である。しかし日本の山の風とヒマラヤの風とは、同じ風といっても性質が違ふことも認識しておく必要がある。

◇ヒマラヤでの高層天気図活用のポイント

北半球の高層天気図を見ると、北極をとりまくように寒気を中心に三つか四つに分れて存在し、この間に峰と谷が形成され、等高度線にそって風が吹いているが、この寒気は一定の位置にとどまっ

ておらず、時によると南下してきたり北上したりする。寒気が南下するか、暖気が北上すれば、この間の温度差が大きくなるので、風が強くなる。寒気が南へ下ってくると、上層の気圧が下がり、上層の谷になってくる。そうすると、この部分の等高度線の間隔が狭くなり風が強くなる。

北大隊が、上層の谷が近づく直前がチャンスといっているのは、寒気の前面がチャンスということである。すなわち、寒気が下ってくる場合には風は南風で弱くなり、これがチャンスという訳である。

一方、ハンググライダーで飛行する時は、気圧の峰の頂上あたりが最もよいと思われる(理由は後述)。

なお高層天気図を注意してみていると、気圧の谷の南部が、雨だれが落ちるように切れ南離れていることがある。これを気象の専門用語では、Cold Vortex (寒冷渦) といい、これが見られる場合には同じ気圧の谷でも、動きが遅くなるので、高層天気図を見る場合の一つのポイントとなる。

このように高層天気図の見方は非常に簡単で、気象の専門家でなくとも少し慣れれば、谷と峰、或いは Cold Vortex 位を見るだけで、気象の動きを予想することができる訳である。

なお、一昨年冬十二月二十八日

に加藤保男隊員の遭難も、高層天気図で追跡してみると、二十七日の朝は谷の前面で風が弱かったが、夕刻には風が出はじめ、ビヴァークした翌早朝には五〇〇MBで、五〇〇ノット(三〇〇MBでは一〇〇〜一五〇ノット)の偏西風に吹かれており、ビヴァークしたことが生死を分けていることがわかる。

◇プレ・モンズーン、ポスト・モンズーン期の状態

谷の前面を狙うことがよいという説明を、冬季の場合を例として説明してきたが、これは、プレ・モンズーン、ポスト・モンズーンのシーズンにも、真夏のモンズーンのシーズンにも、適用できると思われる。但しプレや、ポスト・モンズーンの時は、割合におだやかなフェーズが長いようで、プレ・モンズーンの場合などには、中緯度高気圧の影響のため、30°N付近では、谷、峰の関係がはっきりしにくい場合もある。昨年、山岳同志会隊がエベレストを無酸素で登頂した前日の十月七日の高層天気図を見ると、40°Nの北側に東西にのびる高気圧帯があつて、谷や峰はその北の方にあり、ヒマラヤ地域は高圧帯に入つて、完全にポスト・モンズーン期の安定期に入っていることがわかる。

十月上旬中旬の時期には、モンズーンを起した暖気が南へ下って

いく、いわゆるツルの渡りの時期であるが、この時期には、北極寒気は時には南下することもあるが、平均状態では前面が未だ40°Nより北にある。従つてその中間帯に入るから、谷が通つても、谷が近づいても、昨年十月九日の例にみられる通り、案外風が吹かないことがあるのかも知れない。

プレ・モンズーンの場合も同様で、北極寒気団と南の熱帯気団の間の中間地帯が高圧帯となり、ヒマラヤをおおい、好天が続くと思われる。

なおプレ・モンズーンの場合、注意してみたいことは、等高度線、或は等温線のこんでいるところ、50°Nないしその北側にあるということが、安定期予測の一つの大きな条件であろうと思われる。50°N近くまで上つて来たら、チャンス到来と見たらどうかと思う。

◇ハング飛行についてのアドバイス

ヒマラヤで八〇〇〇mの高峰から、ハンググライダーで飛ぶのに安全な気象条件は、気圧の峰の頂上付近がよい。気圧の峰の中心部分であれば、上層の風そのものも弱く、Local Wind (場の風) の

方が勝つこともあり、局地的にも正確な判断を下し易い。

その他の理由としては、上層の谷の前面では、雲の発生も早く起き易い。雲の湧き出す時間が遅れるのは、峰の中心、或いは少し後面に入ったところに相当する。

上層の谷の通過直後は、上昇気流が強いので、雲も急激に発生し易く条件としてはよくない。かつてアメリカで、スカイダイバーが谷の通過直後に降下したため、強い上昇気流に押し流されて五大湖に落下し、数名が遭難死したことがある。

なお飛行距離を延ばすことが目的であれば、冬の前夜の春先と晩秋がよいと思うが、この時期には、ハンググライダーをかつぎ上げるのが難しいので、やはり、プレ・モンズーン、ポスト・モンズーン期になると思う。

◇ヒマラヤ登山隊への要望

最後に、ヒマラヤ登山隊にとつては、今やファクシミリは登山装備の一つとして必需品となつた観があるが、これに頼るだけでなく、高層天気図を念頭においた観望も大切である。

例えば、積雲の発生時間が、毎

山をきれいにグミは持ち帰ろう

ラダック報告(五)

山本朋三郎

明日カルギルへ向うただ一台のバスに、希望者は一五〇名程。収拾のつかなくなったバスの事務所員は、乗車希望者名の登録を始めた。従って明日スリナガルへ帰りたい者は、早朝、まだ夜の明けぬうちに、バス事務所に行き、朝早い者順に一枚の紙切れに順番に記名。乗車希望者名簿をもとに、乗車券を記名式で発売。切符の発売が十一時であつたり、夕方六時であつたりするので、毎日二回、バス事務所へ行かなければならない。従ってレイから離れたゴンパ見物は不可能である。発売の時、居合せないと飛ばされてしまい、また翌朝、事務所へ出かけて記名せざるを得ない。三日後五日後の予約制はない。すべて前日申込み、十一時夕方六時に乗車券発売のシステム。どうしても早朝、まだ陽の上らぬ中にバスターミナルへ行き、六時頃開く、事務所を待つ以外手はない。記名式なのでレイを離れる前に、一日は切符購入でつぶれる。

早朝事務所に行き、記名手続をしていたら、何故か、観光客を事務所から追出して、ドアに鍵をかけてしまう。理由説明も何もない。其中に事務員の一人が五十種

四方の黒い旗を事務所に掲げる。ワイワイ囂集している観光客の口伝えに依ると、何とバス会社のストライキだと言う。ストライキと言えど赤旗とばかり思っていたが、インドのストライキは黒旗であつた。

今日はインド建国の日で、レイのサッカーランドで種々の祝いの行事見物のため、早朝、一番バスの屋根まであふれんばかりの客が、近郊近から集つて来ている。それなのに、いつ終るか判らぬバス会社の突然のストライキ。明朝のバス切符は、スト中止になれば発売するから、夕方集まるようにとのこと。何だか、今日の祝日をバス会社の連中も楽しみたいからの、ストライキのように思えた。いづれにせよ、次回レイ訪問の時はいつでも切符購入できる、システムになっていてもらいたいものである。

さほど広くないレイの町見物も終っている、食事でもするかとメイン・ストリートへ出かける。おや？ 独りでレイに旅行に来て、経費節約で独り幕営していると言う、あの日本娘は、今日はフランス観光客とつれ立っている。前々からレイ滞在の日本人に

海外の山

八三年の結末

片山全平

一九八三、八四年のカモシカ同人厳冬期エベレスト・ランデブーは遂に成らなかった。中国側からの北壁経由のチョモランマ登頂は、十二月十六日の「デートの日」を氣象ファクシミリで割り出しながら、間に合わず撤収決定の一月六日まで粘ったが、烈風下のチョモランマの登攀条件は、十二月十七日以後は、三十一日と一月一日の二日間だけだった。

撤退の理由は「中国人協力隊員が予定通り使えず」(朝日新聞社)に帰しているが、いかに高地生活に慣熟した者とはいえ、短期間の訓練だけでは、あの季の、あの場所の協力に耐え得るかどうかが、予測は控目ではなくてはならなかったはず。

八三年の英カラコラム隊(ダグ・スコット隊長)については既報の通りだが、英「マウンテン」誌93号は、その詳報を伝えている。荷上げ自前のアルパイン・スタイル、実働隊員十人。四月の長期の日程のなかに、ブロード・ピークとK2を試み、しかも高処順応を織り込み、多分に機動力を持たせた。このため食料の点に留意、低地での体力回復に、女性二人がコック役に回った。

総経費は二万ポンド。一ポンド五百円で換算して一千万円。英国ではどの方面を資金源とするか、主なもの列挙すると、Mountaineering CouncilとEverest Foundationから二千ポンド、

Daily Telegraph から七百ポンド。個人負担は千五百ポンドと、この分の比重は大きい。

一行は五月五日イスラマバードに集結、高度順化のため、ムスタグ・パスにも踏み入れ、一八八七年のヤング・ハズバンドの業績を偲んだ。そしてまずねらいをつけたのがロブサン・スパイアのサウス・ピラー。約二千フィートのビック・ウォール登攀であつた。

カラコラムのビック・ウォールの歴史は七五年のイタリア隊のグラランド・キャシードラルに始まる。七六年の英トランゴ・タワー登攀が続き、これを踏まえて、七七年は同南壁に挑んだロスクリーの米隊で、四日間のアルパイン・スタイルを導入、さらに七九年、ロスクリーらは、ウリ・ピアホ東壁登攀に十日間をかけた。

ロブサンにはスコット隊長が主役(三人)。完登は外したが、試作品の使用をも兼ねており、登山終了後は、ベースで女性コックのホーム・メイドのパンに舌ずつみを打ったという。六月十六日ブロード・ピークへ転進した。

今度はアンデ・パーキンとアラン・ラウスが主役。懸念された高処順応は、スコットらの登攀中、K2探索によって果しており順調な仕上がり。三日目には同隊のジーン・アフアニエフとロジャー・バクスター・ジョンが追いつき、この四人が登頂を果たした。さらに後続隊があり、スコットとサスタッドが登頂したが、最終パーティーのペーター・テクストンが肺水腫のため死亡した。このアクシデントを乗り越えK2に転進、スコット自身K2西稜三度目のものであったが、七二〇〇m(強)で中止した。終局的な目的は達し得なかったが、パラエティに富んだこの登山活動は、カモシカ同人隊の秋のローツェ、さらに厳冬期エベレスト登頂とともに八三年を色どる活動であつた。

聞くと、腕を組む男性が時々変るとのこと。レイ見物客のガイド役でもしているのかしら。得体の判らぬ娘である。お布施は仏教での大事な行である。受ける方も差出す方も仏の業なのである。

四年前、マナスル街道のウレリ部落で、たった一人で、荷かつぎ人夫も備わず、トレッキングしていた日本娘に出合い、ビックリさせられたことがあった。一昨年暮、独り旅の日本娘がカトマンズとポカラの中間辺りで、殺され裸で捨てられていた事件もあった。元気がよいのか、人を信じ切っているのか、無鉄砲なのか判断に苦しむ最近の日本娘達である。治安・風習・性觀念など、チャホヤされていて、どこへ行っても日本と同じだと、誤って納得しての、日本娘の独り旅としか受取れず、背中の寒い思いがする。年代の差は余りにも大きい。ラダックは幸にも真言密教の土地。レイにいた日本娘も仏さんの加護で、無事日本に帰国できたと思う。

レイのゲストハウスには人生を楽しむ、いろいろな旅行者であふれていた。七十何才かのイギリス老人は、レイに魅せられて毎夏二ヶ月自炊生活。西独を出てアフリカを皮切りに、一年目に印度に入ったと言う三十代の農家の息子夫婦。旅が何より好きだと言う、色白で目ばかりギョロリとした二十七才の日本青年は、金をた

め会社をやめて、独りでバンガラデシから印度に入り、急性肝炎になり、半年間印度の病院に食事付きで無料入院。やっと退院してレイに來たが、完全治癒していないから、来春までもう半年レイで越年しようかな、とノンビリ構えている。泥。日干レンガのゲストハウスの屋上では、油をぬって日光浴ばかりしている、美しい三十代の外人女性が四人。スケジュールを立てて、せかせかと旅行をしているのは私達だけである。

いくらせかせかしても、三七〇五mのレイである。二百位しかない岩山の上に立つ王宮まで、たっぷり五十分はかかる。空気が薄いのと、インド料理で食が細った体力の消耗からである。土地の人は十五分で登る。九層の石と木組と泥レンガで出来ている王宮は、空気の乾燥とほとんど降雨ゼロのため、一八三四年、カシミール藩王軍の破壊した当時のまま。下から見上げると堅牢に見えるが、内部は何もなくガラ空洞化している。入口のくぐり戸は、堂守の小坊主君が五ルピー出さねば南京錠を開けてくれない。王宮の屋上からの眺めはすばらしい。遠くヒマラヤ山脈が白雪を戴いている。

記念にと、十四、五才の小坊主君にカメラを向けると、クルリと背を向けてしまう。写真にとられると寿命が縮つてしまうと言う。慶応年間生まれの私の祖母も、昔

写真にとられる時は、必ず両手首を着物の袖の中に引込めて、カメラに向っていた。両手を出して写真に写ると、手先から生命が吸取られると、堅く信じていた。五十年余前亡くなった、明治気質の祖母を、遠く、西方浄土のラダックの澄み切った空で想い出す。

王宮の廃墟見物を終って、王宮にへばり付いている小さなゴンパがある。赤帽派のケサをいけた、やはり十四、五才の瞳の良く澄み目鼻立ちのとのつた小坊主君が、中に一体大きな仏像があるから見て行け、と言う。入口の南京錠の開門料一人三ルピーだと言う。三人連れなので、五ルピーにまけると交渉。小坊主君はニコニコ笑って、「ツリー・ツリー・ツリー」(一人三ルピーとの表現)と繰返し返事。何とか五ルピーにまかせせようとするが、鍵の束をジャラジャラ振って、「ツリー・ツリー・ツリー」の一点張り。可成りたつてまけそうもないので、致し方なく、「三ルピー、O・K」と言うが、堂守としての彼の自尊心を傷つけてしまったのか、小坊主君は「フイ」と物かげに消えてしまった。ヤレヤレ仏様を怒らせてしまった。露路裏の雑貨や老主人の「おれ達はラダック人だ」との自尊は、子供にも脈々と受け継がれている。レイではスーベニヤ・ショップ以外余り値切れない。

(完)

国際未確認動物学会発足

山に興味を持つ人の中に、「イエティ」に無関心な人はいないだろう。一般の民衆の中でも「イエティ」、「ネッシー」のような「怪物」は良く話題になるし、それらの存在・不存在に就ての論議は活発である。しかし、今まで学者達に正式にレビューされた上で、学術的に発表された論文は少なく、どちらかと言えば、多くの学者は自分の評判に就て警戒して、この問題を避ける傾向がある。

この学術的空白を埋めるために、最近、国際未確認動物学会(International Society of Cryptozoology)が発足した。

現在存在が認められた動物の中には、かつて未確認とされた動物は幾つかある。実例として、ゴリラ、「オカピ」という中新世的麒麟科動物、矮小河馬、白亜紀に絶滅したと思われるが今世紀再発見されたシラカンスに、「洪積世的猪」、「巨大口(メガマウス)」という新しい科の鯨、巨大鳥賊(イカ)等が上げられる。

「イエティ」と「ネッシー」以外にも、現在未確認ながら存在が噂されている動物は、巨大蛸、色々な海中怪物、中央アフリカの「モケレ・ムベムベ」という中生代の

恐龍に似ている動物、「イエティ」以外の人間状動物等。

会長、未確認動物の本を書いたフランスの Bernard Heuvelmans 氏
副会長、Roy P. Mackal (米国)
書記・会計係

J. Richard Greenwell (米国)
理事会員 (アルファベット順)

Dmitri Baryanov (ソ連)

Eric Buffetaut (フランス)

Joseph F. Gernard (米国)

Philippe Janvier (フランス)

Grover S. Krantz (米国)

Paul H. LeBlond (カナダ)

Nikolai Spassov (ブルガリア)

Phillip V. Tobias (南アフリカ共和国)

Leigh Van Valen (米国)

Forrest G. Wood (米国)

Zhou Guo-Xing (中国)

George R. Zug (米国)

理事会員は皆大学が博物館等に属している学者である。日本人理事会員は未だないのは残念で、候補者の出現を期待している。

学会誌は一年一回出版されている。出版物だけを購読することはできるが、会員になるより高い。問い合わせ先は次の通り。

J. Richard Greenwell, Secretary-Treasurer, International Society of Cryptozoology, P.O. Box 43070, Tucson, Arizona 85733, U.S.A.
Tel. 602-884-8369

(ハロルド・ソノモン)

× × × × ×

高所肺水腫・高所

脳浮腫の既往者の

追跡調査

高所障害として総括されている高山病の中でも、高所肺水腫(HAPE)と高所脳浮腫(HACE)は、発症・進行が急激であり、危険性の高いものである。

この二症状は、それぞれ単独に、あるいは合併して発症するが、そのメカニズムは、現在なお不明である。

しかも、HAPE・HACEの既往のある人は、前回発症時と同様の条件に出会った場合、再発しやすいと言われている。このことは、体質的(低酸素に対する敏感な感受性、遺伝など)に、なりやすい人がいるかもしれないことを想像させる。

高所に行っても、HAPE・HACEにならなかったことのない人(いわゆる「山に強い人」と、たかだか三〜四kmの高度で、これらにならなかったことのある人とを比較検討すること、この体質的要素を探ることが、可能であるかもしれない。

今回、二つのプロジェクト・チームを発足させ、HAPE・HACEの既往のある方の協力を求める動きが起っている。高所登山中

(国内、海外、登山者、トレックカーを問わず)、激しい頭痛、嘔吐、激しいせき、ピンク色が鉄さび色の多量の痰、顔や手足の著しいむくみ、意識障害、歩行不能などで下山を余儀なくされたことのある方は、左記にご連絡され、今後の研究にご協力いただきたい。

× × ×

遠征・登攀ノートへ

寄稿のお願い

「山岳」編集委員会

アメリカン・アルパイン・ジャーナルをはじめとして、各国のジャーナルにはその年の各地域の登山記録を集めた短報欄のあることはご存じのとおりです。

近ごろの日本人の海外登山は、その量において諸外国を大きく上まわっており、日本はまさに海外登山大国となりました。では一年間にいったいどのくらいの数が出て、どこで、どのような活動を行っているのかはなかなかつかみがたい状況です。今や日本人の登山は質的にも無視しうるものではなく、外国のジャーナルにもボツ

× × ×

東日本(中部・北陸以東)
〒280 千葉市亥鼻一ノ八ノ一
千葉大学医学部呼吸器内科
栗山喬之
西日本(近畿以西)
〒604 京都市中京区壬生東高田
町一ノ二京都市立病院呼吸器科
中島道郎
(堀内 章雄)

た。しかしそれは全体のほんの一部にすぎません。

『山岳』はこの日本人のエネルギーな登山の記録を世界に知らせる役割をはたすべきだと考え、七十八年号(一九八三)より短報(遠征・登攀ノート)を掲載することにしたので、下記要領にて短報をお寄せ下さいませようをお願い致します。

対象地域は特に限定いたしません。が、一週間程度の登山活動は割愛せざるをえません。まためったに人の入らぬような地域の記録は積極的にとりあげたいと思っております。

毎年多くの登山隊が日本から出発するわけですが、そのメンバーの中には少なからぬ数の本会々員が含まれていると思われます。まずは会員の皆様の記録を集めたいと思います。ご本人、または知人の方で登山計画がございましたらご一報下さい。

× × ×

遠征・登攀ノート

(記載要領)

- ① 年度・期間
- ② 山名(ローマナイズ)・標高
- ③ ルート・成否
- ④ 隊の名称
- ⑤ 隊長名・隊員数
- ⑥ 登山の概要(300字以内)
特記事項
- ⑦ 報告(出版物・寄稿誌名)
- ⑧ 英文要約
・ AREA
・ FIRST ASCENT,
ASCENT, ATTEMPT
の別とその内容
・ PERSONNEL

(例)

- ① 1982年3月〜5月
- ② オンミ・カンリ (Ohnmi Kangri) 7,028 m
- ③ 南稜 登頂
- ④ 東京都庁山岳部ネパール合同登山隊
- ⑤ 隊長 金子利三 隊員 11名
- ⑥ 4月3日、パンドラ氷河上の5,050m地点にベースキャンプ建設。7日登攀を開始し、12日キャンプ1(5,750m)、18日キャンプ2(6,150m)、21日キャンプ3(6,350m)を建設。99日、金子隊長、ナワン・チョクラン、中島五味、塩田隊員らにより第一次登頂、5月1日、黒木、小原隊員、高所ポーターのアン・テンバラにより第二次登頂。なお、オンミ・カンリの標高については、従来7,028m、7,922m等と言われてきたが、周囲の山などから比較すると、7,400m弱ではないかと推測された。
- ⑦ 出版 OHNMI KANGRI 1982
寄稿 HIMALAYAN JOURNAL, DER BERGSTIEGER, 岳人
- ⑧ AREA: Himalaya, Nepal
FIRST ASCENT: Ohnmi Kangri, 7,028m, via the S ridge, summit reached on April 29 by Kaneko & 3 members. and on May 1 by three.
PERSONNEL: Toshizo Kaneko & 11 members

(『山岳』78年・1983より。なお同誌をご参照下さい)

アムネマチン峰六二八二mは、

上越山岳協会は、一九七四年頃

本書の内容は、アムネマチンへ

登頂記によれば、登山隊は多田

この山はアプローチが長く、キヤラパン出発点の雪山公社三七五〇mまで西寧市から約七〇〇Km、車で五日間（内二日は瑪陀県大武三七七〇mで滞在）を要している。

隊員報告では、水津重雄隊員の

読後感として、商業ベースにの

来への、客観的把握と展望に触れるような編集をしたならば、もつと読みごたえのあるものになったのではないか。また、五月八日C1から雪糞へのルート作中の雪崩について、今後のためにももう少し詳細な説明がほしかった。せ

渡部誠一郎著

新砕氷艦 “しらせ” の就航と併

せたかのような社の意図は、より効果があつたと思われる。外国と違い、本邦では公の船には一切個人名は付けない慣例であるが、新艦名実現に尽した熱心な人の努力が実つたとも仄聞している。

後に当てられていて、新書版なき。

全体的にみて、登山隊の中国や
アムネマチンへの想いが、にじみ
でている報告書である。

A5判、二六五ページ、一九八二年一月、ベースボール・マガジン社発行、定価二四〇〇円
(川上 隆)

記や他書にもない写真も収められている。ただ掲載されている切手の肖像は全く似ていない。山岳三十二年二号にある岡田喜一氏撮影の像は、面影を真につたえている。

白瀬は資金援助が得られなく打ちひしがれていたとき、在野の大

隈伯が推進母体の後援会長に頂いてから、計画は具体化した。肝腎の船が仲々決まらず、遠征は絶望視された。外国隊の探検でも、用船問題は常にな成否にかかったが、日本よりまだ有利だった。当

時南の氷海に耐える船がなく、関係者は窮していた処へ、郡司の船が戻ってきた。千島以来の対立から譲渡交渉にも応ぜず、はっきり断わられた。でも望みを嘱して大隈伯は郡司を早稲田の邸に招いた。

以下は、本書にも「極」にも真相は語られてないので、少し説明したい。胸中怒りをもつ郡司は、断乎拒絶の決意で伯の前に伺候したとき、白瀬と視線があった。そ

の時忘れていた情景が郡司の脳裡に遊んだ。命より大切な造ったばかりの船は、いま譲らなければならぬと悟る他なかった。というのは、千島で老父と自分の身代りになってくれた恩義に対しては、頑くかなな郡司の心も動き、急転用船問題も決着した。

な小白瀬はアラスカ北極圏内で冬営し、極地探検の訓練をしたようになっているが、翁の生前年譜に表作成で、逐年毎にお話を拝聴した際も、われわれ（谷口、木村）は確信できなかった。北極の話は大変興味がある一方、フィクションかどうか、未解決しているが、識者の方のご教示を頂ければ幸である。

同じ内容を扱っても、「極」は文学的熱情のこもった白瀬の心の動きが鮮やかに捕えられており、本書は報道機関が広い客観性から纏めてあり、夫々特色をもっている。

遠征関係の資料は、芝の多田の許に三宅雪嶺デザインの南十字星旗が教葉と記録類、デヴィット教授から贈られた著書など戦災で灰になったのは惜しかった。

新書判、二〇〇ページ、昭和五十七年五月、秋田魁新報社刊、

(木村 義昌)

(木村 義昌)

・会務報告 12月

12月理事会

12月5日 午後6時30分
本会ルーム

出席者

佐々会長、田口、山田副会長、
神崎、大倉、西村、赤松、松家、
平野、長谷川、平井、絹川、皆
川、梅野、高遠各理事
松田監事

委員・欠席

飯野、鳴原、中村各評議員
田村、河村、水野、鈴木、村木
各理事

報告事項

▽年次晩餐会は盛会で無事終了し
た。約三四〇名出席、内支部六
〇名。

▽支部長会議(十二月三日) 報告
十九支部中十八支部が出席。

八十周年記念事業案について、
山田副会長より説明、募金も含
めて了承された。

会費の格差については、同一に
すること、支部に還元金を多く
してほしい旨の意見が大勢を占
めた。

▽八十周年記念事業準備委員会報
告予算を含めた原案を作成中。
展覧会開催については、会場の
確保が先決であるが、企画につ
いて各委員会から積極的に協力
してほしい。

(2頁より)

日少しづつ遅くなっていくことを
観察したとすれば、次のように説
明できる。

気圧の峰の後面では、南系統の
風が吹き、前面では北系統の風が
吹く。北系統の風の時は上層が冷
たくなり、寒気をどんどん下ろす
ので、雲の発生も朝早くからとい
うことになる。そしてだんだんに
峰に近づくに従い、発生時間が遅
くなって峰の安定期に入り、やが
て天候は悪くなる。このようにす
れば観天望気からも、逆に峰と谷
の動きを知ることができる。

東海支部よりガウリサンカール
登山の記念事業承認の希望が出
ているので検討する。

▽カンチエンジュンガ現状報告。
12月23日出港の船便で出荷。

米国でハングライダー新機種の
試験飛行を行なった。

壮行会を1月21日に関催する。

1月理事会
1月10日 午後6時30分
本会ルーム

出席者

佐々会長、田口、山田副会長、
田村、神崎、大倉、西村、松家、
水野、平野、長谷川、平井、村
木、皆川、梅野、高遠、河村各
理事、松田監事、宮下、鳴原、
中村各評議員、(委任) 赤松、
鈴木、絹川、小倉、飯野、山口
報告事項

ヒマラヤ登山隊の皆さんにお願
いしたいことは、天候の変化に気
がついた時には、個々の現象でも
よいから、日時、気象現象を記録
にとめておいて報告して欲しい
ことである。このような報告がな
いと、何時までもフィードバック
ができず、ヒマラヤの気象も、単
なる原則論に終始してしまうこと
になる。(文責 松田 雄一)

(注)
本稿は昭和五十八年十月二十四
日夜、JACルームにおいて、カ
ンチエンジュンガ委員会・高処登
山研究委員会共催で開催した、ヒ

▽八十周年準備委員会

十二月十七日、池袋西武百貨店
と打ち合わせ、「日本登山史と
現代登山」をテーマに本年秋行
う。

▽ガウリサンカール遠征
再調査し検討する。

▽カンチ縦走
十四トンの荷物を十二月二十三
日横浜より出荷、資金について
は千五百万円ほど集める。

隊員も決定した。

▽記念集会について
全国を七ブロックに分け、本年
八月より一年間内で実施した
い。

審議事項

シンポジウム「ネパール・ヒマ
ラヤ地域の荒廃をどう防ぐか」
の共催について

マラヤの気象に関する研究会(出
席者十八名)での宮内駿一氏(気
象庁OB、海洋気象情報社常務取
締役、日本鳩レース協会・グライ
ダー協会の気象顧問)の講演をま
とめたものである。講演後の真剣
な質疑応答をも含めて、極めて有
意義な会であった。

なお宮内先生は、本会での講演
後、数日してから入院、十二月二
十一日、肝不全により急逝され
た。はからずも、本稿が宮内先生
の最後の遺作となった訳である。
ここに謹んで哀悼の意を表する次
第です。

共催として二月四日、国際文化会
館で行うことを了承。

木暮祭のお知らせ 五月十九日
例年の通り金山平で行います。多
数会員の参加をお待ちします。

あとがき 発行が大変遅れまし
た。会員各位にこめいわくをおか
けたことを深くお詫び申し上げます。
(山崎 安治)

昭和五十九年三月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々 保雄

編集代表 皆川 完一

電話東京(20) 四四三三

振替口座東京三三三八九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂